

## 幼児教育界を切り拓いた齋藤善郎教授の48年間を辿る

### 48-year footprint of Professor SAITO Yoshiro: A pioneer of Japanese early childhood education

磯部 錦司\*

ISOBE Kinji\*

キーワード：幼児教育，障害児，男性幼稚園教諭，経営

Key words: early childhood education, children with disabilities, male kindergarten teacher, management

ご本人と周りの方へのインタビューから、齋藤氏の48年間の功績を辿り、教育者として、研究者として、そして人間としての魅力を探ってみたい。

氏は、昭和50（1975）年に早稲田大学教育学部を卒業したが、周りの期待に反し、氏はどこにも就職せずそのまま東京に留まっていた。「私が本当にやりたいことはなんだろう」と考える日々が続いた。いわゆるモラトリアムの時代である。卒業後、障害児教育に関心を抱いた氏は、当時、幼児の障害児教育において先駆的な取り組みをしていた武蔵野東幼稚園でボランティア活動を試みていた。この頃は、私立幼稚園が障害児を受け入れることはほとんど皆無であり、東京でもそのような園は稀であった。氏は、ご親族が園長を務める豊橋の園（豊橋才能教育幼稚園）に教諭として戻ることを条件に、園が障害児を受け入れるように園長に交渉した。まだ行政からの助成も無いころであり、経費、人材など園の負担は大きかったが、1年後に園はそれを実現させ、豊橋才能教育幼稚園は通常の保育室に障害児を受け入れることを可能とした愛知県で最初の私立園となった。そして、氏は幼稚園教諭となり豊橋へと戻ってきたのである。氏が予想したように幼稚園教育における障害児の受入れのニーズは大きく、浜松や名古屋からも園児が豊橋へと通ってきたという。その後、昭和55（1979）年に義務教育への全入学が制度化され、システムと補助金が整備され、全国の幼稚園においても障害児保育は広がりを見せていった。

もう一つこの時代において着目したいところは、保育界において男性保育者の道を切り拓いたところである。当時、愛知県には男性の幼稚園教諭はほとんどいなかった。そして、氏は、8年間、教諭として保育実践に携わり、昭和58（1983）年に園長に就任した。特に氏の力が発揮されるのはここからである。

まず園長として試みたことは、一斉活動中心の教科主義的な保育からの脱却であった。鼓笛隊や運動会、お習い事的な

保育を廃止し、子どもの興味関心から始まり、子どもの主体的な自由あそびを中心に、子どもがつくりあげていく保育を目指した。そして子どもに「不思議なことを見つけて探してみよう」と呼びかけた。そこには、学生時代に学んだピアジェやピゴツキー、デューイ等の理論が基盤としてあった。その教育は、今でこそ世界の教育・保育先進国では主流となり、「生活基盤型保育」における「学びのプロセス」として理解されているが、しかし、この時代の日本ではその教育は保護者には理解されず、そのような理想の保育を求めれば求めるほど園児は減っていったという状況にあった。周りには「あの園は遊んでいるばかりじゃないか」と言われ、とうとう園児は60%程にまで落ち込んだ。保育料を値上げすることも余儀なくされたが、氏は方針を貫いた。園児が減ったことを逆手にとり、「一人ひとりに対応した保育」を推進し、3歳児を1クラス15名（通常は当時25～35名）、4、5歳児を25名の少人数クラスにして対応した。すると、「一人一人を大切にしている」「内容の深い保育をしている」と評判が広がり、園児は徐々に増加していったという。ここが才能幼稚園のターニングポイントであったと思われる。以後、同系列幼稚園である田原赤石幼稚園園長、林丘幼稚園園長を歴任し、幼保一元化では、いち早くその実現に取り組み、平成27（2005）年より豊橋才能教育こども園園長に就任した。

愛知県私立幼稚園連盟で活躍されているころ、周りの人たちは氏のことを「歩く教育要領」と呼んだ。愛知県幼児教育研究協議会委員、愛知県私立幼稚園連盟第一教育研究部長、同副会長、全日本私立幼稚園連合会東海北陸地区教育研究委員など中部地区の幼稚園教育の根幹に携わり、その発展に深く寄与し、平成27（2015）年には文部科学大臣表彰（教育者表彰）、平成28（2016）年には藍綬褒章が授与された。これらの実務実績は極めて高いものである。連盟の方に何うと、信頼が厚く、普段は穏やかで物静かな人柄であるが、連盟の席では、熱く激しい口論もあったという。幼児教育について

\* 相山女学園大学教育学部

2021年11月9日受付

の「熱い思い」がその心中に秘められていたことが伺える。

梶山女学園大学教育学部との関わりは、平成22（2010）年に非常勤講師を氏に依頼したところから始まる。そのころ幾人かの本学教員も連盟の主催する研修会の講師として、氏をとおして関わっていた。また、平成27（2015）年に日本保育学会が本学で開催される運びとなり本学に実行委員会が組織されたとき、保育現場からも実行委員会に加わってほしいという声から、氏へ委員を要請し、快く引き受けていただいた。氏が実行委員会に加わっていただけた甲斐あって、大会は現場からの多大な協力を得ることができ、過去最大の発表数と参加者を記録し終えることができた。さらに翌年、学部は「実務経験と研究業績が有する保育系教員」の新規採用者を探していたが、どちらも兼ね備えた人材に出会うことはなかなか厳しい状況であった。真っ先に名前が挙がったのがここでも氏であったが、当時、連盟の副会長であった氏は、次期会長候補ともいわれていた。また、園の理事長（学校法人蟬川学園理事長）と園長職にも携わり、来ていただくためには壁は大きかった。教員採用は公募で行われたが、厳選なる人事委員会の選考において結果として氏が選ばれ、当時の大森隆子学部長が直接に連盟に伺い割愛をお願いし、ご本人には園長を退職いただき、本学へ来ていただけることとなった。

氏が本学へ赴任されて以後、保育者養成としての質は確実に高まっている。まず、学生がリアルに現場を理解するようになった。「自分の目で見て、確かめて、判断して、納得して勤めてもらいたい」という氏の思いが授業の中で反映されている。担当科目は「保育内容総論」「保育指導法（言葉）」「言語表現の指導法」「保育指導法（環境）」「保育相談支援」等である。氏の授業は「実践と理論が結びついた授業」であり、「具体的な話しだと学生が耳を傾けてくれる」という氏の言葉にもあるように、「しっかりとした理論を身に付けてほしい」という願いが授業づくりに織り込まれている。また、キャリア面では、保育現場でアルバイトやボランティアを行う学

生が増え、職種や園を自分の判断で選ぼうとする学生が増えてきているのも氏が赴任されてからの特徴である。特に就職活動の頃になると学生が相談に多くやってくる。氏は丁寧に耳を傾け親身に相談にのり、最後は自分で判断させている。それは現場での保育者養成でも同じであるようだ。氏が運営する園では、その園で育てた人が園長となっている。「自分で判断し、切り開いていくチャンスを与えなければいけない」と氏は言う。「現場で育てる」という氏の教育者魂が聞こえてくる。

## 付 記

幼稚園の職員の方々にお話を伺うと、「先生たちのことをよく見てくれていて、認めてくれる」、「居てくださるだけで安心感がある」、「毎朝ジョギング5キロしている」、「以前は、リレーで子どもと一緒に走ることもあった」、「ビールが好き」等々のエピソードをお聞きました。心温まるお話でした。

筆者の研究室は齋藤先生の隣ということもあり、いつも先生の優しく暖かな人柄に触れ、助けていただくことも多くありました。本稿を執筆させていただくにあたり、あらためてインタビューという形でお話を伺い、先生の半世紀の道のりに深く感銘を受けました。先生は本学部にとって「理論と実践を結びつけることのできる貴重な存在」でした。ご退職後も、研究者魂・教育者魂を現場から私たちに投げかけてくださることを願っています。これまでの本学部でのご貢献とご活躍、そして先生と共に過ごせたこの5年間に、心より感謝申し上げます。

本稿を執筆するにあたり、齋藤善郎先生（2021年11月23日）、愛知県私立幼稚園連盟関係者（2021年11月24日）、卒業生、学校法人蟬川学園関係者（メール取材）には、筆者の取材に応じていただいた。ここに記して感謝いたします。